

「社会で生きる力」を 大学はどう育てているか

大学選びは“偏差値”から“マッチング”の時代へ。
大学入試も多様化が進み、
ますます大学の教育の中身を見ておくことが重要です。
どこで学べばわが子は伸びる？
保護者の時代とは様変わりした、最新の事例に注目していきましょう。

教育ジャーナリストが最新解説
教えて！保護者の時代と
「大学入試」はどう違う？ 渡辺敦司…………… p.34

変わる大学教育 最新事情 Trend of University

キャリア
教育

國學院大學…………… p.36
明海大学…………… p.38

新しい
学び

大阪電気通信大学…………… p.40
成蹊大学…………… p.42
聖徳大学…………… p.44
千葉商科大学…………… p.46

教えて！

保護者の時代と

「大学入試」はどう違う？

2021年度から実施されている大学入学共通テストをはじめとして、大学入試が大きく変わっています。

注意しなければならないのは、入試はもとより大学進学をめぐる環境が、保護者世代とは大きく違っていることです。昔の感覚でお子さんの大学入試対策を考えてしまうと、足元をすくわれるかもしれません。高校生活でどのような備えをすればいいのか、考えていきましょう。

センター試験から 「共通テスト」へ

大学入学共通テストは大学入試センター試験と違って多くの文章を讀んで考えながら解かなければならないから大変そうだが、どうやら私立大学などとは別の対策が必要らしい——。ニュースなどで見て、そんな印象を抱く保護者の方も少なくないでしょう。

事実、共通テストは知識を基に思考力や判断力を問う問題が主として出されるため、センター試験よりも難易度が上がることは、導入前から想定されていました。センター試験時代も含めて平均点が過去最低となる科目が続出しているのも、

無理からぬところです。

このような出題の背景には、「高大接続改革」という考え方があり、時代の変化に合わせて高校教育や大学教育が変わらなければならない、大学入学者選抜も一体で変えよう、というものです。

高校教育は、①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③主体的に学習に取り組む態度——という「学力の3要素」を育成するものとされています。大学入学者選抜でも3要素すべてを評価し、入学後の大学教育でさらに伸ばして、社会で活躍できる卒業生を輩出してもらおう——というのが、高大接続改革の理念です。

ここでは「大学入試」と言わず、あ

えて「大学入学者選抜」という言葉を使いました。これからの大学入学者選抜は、ペーパーテスト一発という「入試」のイメージを変えることが求められるからです。

学力の3要素が問われる 「入学者選抜」

保護者世代の学生時代は、ちょうどAO入試が拡大し始めたころだったと思います。一方、高大接続改革では、AO入試は「総合型選抜」、推薦入試は「学校推薦型選抜」、さらに一般入試も「一般選抜」へと、名称を変えました。

AO入試が登場したころ「一芸入試」と呼ばれるような形態もありましたが、あくまで多様な選抜方法を

取り入れることにより、意欲ある学生を選抜しようというのが本来の趣旨でした。一方でAO入試は、学力の3要素のうち知識・技能を十分に問わない「学力不問入試だ」と指摘されることも、しばしばありました。

そこで高大接続改革では、たとえ一般選抜であっても学力の3要素すべてを評価して選抜するよう、大学側に求めました。逆に総合型選抜や学校推薦型選抜でも、共通テストや小論文・口頭試問などを使って、知識・技能や思考力・判断力・表現力を活用することが義務づけられています。

そんな高大接続改革を見据え、多くの高校では近年、思考力・判断力・表現力をはじめとして学力の3要素をバランスよく伸ばそうと努力してきています。中学校までの「総

教育ジャーナリスト **渡辺敦司**

教育専門誌を中心に、教育行政から実践まで幅広く取材・執筆。Webサイト「リクルート進学総研」に「教育トピック 教えて!」シリーズを連載。

■新しい入学者選抜の例

※入学者選抜の内容は変更になる可能性があります。出願の際は最新の募集要項をご確認ください

島根大学

総合型選抜「へるん入試」

学びのタネ(高校生の好奇心と探究心)を育成・評価する。出願前から面談会を実施。入学前セミナー、初年次教育など入学後の教育で学びのタネを育てていく。

出願 ・調査書 ・志望理由書
・クローズアップシート

高校段階の活動のなかで最も力を入れて取り組んだものの一つについて、その経験から気づいたこと、学んだこと、考えたことを記入

試験 読解・表現力試験 面接(総合理工学部のみ理数基礎テスト)

大正大学

総合型選抜「地域戦略人材育成入試」

自らの興味・関心(マイテーマ)で課題研究などの探究(マイプロジェクト)を実践した経験を評価する。入学後はマイテーマにそった授業・活動を支援、伴走していく。

一次審査 ・調査書 ・志望理由書(3000字以内)
探究してきた学びの「これまで」を評価

二次審査 プレゼンテーション・面接
以下4つに基づいて「これから」を評価
・自己探究計画 ・学問探究計画
・価値創造計画 ・コミュニティ貢献計画

桜美林大学

総合型選抜「探究入試Spiral」

探究に取り組んできた経験を学内外のコンテストや発表会等で発表してきた人が対象。授業、部活動、自主活動など形式は問わない。経験を通して何を学んできたかを評価する。

一次審査 書類審査
探究学習報告書、活動報告書、成果物など出願書類を評価(桜美林大学の探究プログラム「ディスカバ!」や桜美林大学が定める外部アワードでの優秀な成果を上げた者は認定証や受賞などの証明資料提出のうえ一次審査免除)

二次審査 面接 各審査の内容を基に総合的に審査

総合的な学習の時間」を「総合的な探究の時間」に衣替えし、課題発見・解決学習などに注力しているのは、その表れです。
「入試」対策ばかりに気を取られるのではなく、高校での学習にしっかりと取り組むことで3要素を伸ばすところこそが、「入学者選抜」に備える王道なのです。

増えてきた

「育成型」や「探究」重視

高大接続改革が「大学入試改

革」とどまらず、高校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体で改革するものであることは、先にも指摘しました。高校と大学をつなぐのは「入試接続」ではなく「教育接続」だ、と言われるゆえんです。そんな「教育接続」を模索する動きの一つが「育成型」と呼ばれる選抜形態です。

「育成型」は、高校までの学びを総合的・多面的に評価し、大学で学ぶしていく力や意欲を入学者選抜を通して育てていくような形態を指します。受験生にとっては大学教育を受ける

ためにどんな力が必要になるかがよく理解でき、受験科目以外の勉強にも力を入れなければならぬことも痛感できます。一方、大学側にとっても、そんな選抜方法で評価した方を入学後にしっかりと伸ばす教育を工夫することに直結します。

育成型入試は追手門学院大学(大阪府、私立)の「アサーティブ入試」を皮切りに広がり、国立大学でも▽お茶の水女子大学の「新フンボルト入試」▽金沢大学の「KU GS特別入試」「超然特別入試」▽京都工芸繊維大学の「ダビンチ入

試」▽奈良女子大学の「探究力入試『Q』」▽島根大学の「へるん入試」(コラム参照)――など目白押しです。

なかでも高校の「総合的な探究の時間」での成果を評価しようという動きは、国公私立を問わず拡大しています。大正大学の「地域戦略人材育成入試」(同)や桜美林大学の「探究入試Spiral」(同)は、その好事例と言えるでしょう。

● 文部科学省は先頃、大学に初年次教育とアドミッション・ポリシー(入学者受け入れの方針、AP)を密接に関連づけることなどを求める指針を打ち出しました。APは「入学者にどのような学力を求めらるか」を示しますが、それが入学後の教育にきちんと接続していくかがさらに求められているのです。いずれにしても、大学に入ってから何を身につけて、社会で活躍できるかが勝負です。そのための準備を高校時代に幅広く行っておくことを保護者は応援するとともに、せっかく高校で身につけた力をさらに伸ばしていく教育を行っている大学かを選ぶ目も求められていると言えるでしょう。

変わる大学教育の身を保護者もぜひ知っていきましょう。